

西富士地域

土地分類基本調査

富士宮

5万分の1

国土調査

静岡県

1979

序 文

国土は、将来にわたってかけがえのない生活の場であり、生産の基盤であります。この限られた国土の開発整備ならびに保全を合理的な土地利用計画のもとにすすめるため、国土の実態を把握する必要があります。

さいわい国において、国土の自然的要素を科学的かつ総合的に把握して、このような計画の基礎資料とするための調査を国土調査法による補助事業として行なっています。本県においてもこの制度を活用し、昭和46年より5万分の1「浜松」の図葉を出発点として「掛川」「御前崎」「住吉」「静岡」「清水」「吉原」「駒越」「沼津」「御殿場」の各図葉を順次調査を完了させ、今回「富士宮」図葉の調査を実施しました。成果につきましては行政上に利用されることはもちろんのこと、広く県民の皆さんに利用されることを希望しますとともに、資料の収集、調査、図簿の作成に御協力いただきました関係者各位に対し、紙面を借り深く謝意を表します。

静岡県農地森林部長 鈴木和可

ま え が き

- 1 本調査の事業主体は静岡県であり、国土庁土地局国土調査課の指導をえて実施したものである。
- 2 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図、および土地分類基本調査簿である。
- 3 調査の実施、成果の作成機関、および関係担当者は、下記のとおりである。

総合企画調整編集	静岡県農地森林部農地企画課	課長	中本庸弘
		係長	小笠原勝彦
		主任	山本貢
		技師	加藤忠敏
地形調査	静岡英和女学院短期大学	教授	北川光雄
傾斜区分調査	〃	〃	〃
水系谷密度調査	〃	〃	〃
表層地質調査	静岡大学理学部	教授	土隆一
	〃	助教授	黒田直
	〃	助手	茨木雅子
土壌調査	静岡県農業試験場	主任研究員	近藤鳴雄
	〃 林業 〃	主任研究員	梶富美夫
	静岡大学農学部	教授	加藤芳朗
	東京農工大学農学部	助教授	浜田竜之介
土地利用現況調査	静岡県農地森林部林政課	主任	桐山毅
	静岡県農業試験場	主任研究員	近藤鳴雄
	駒沢大学		山口一俊
利水現況調査	静岡県農地森林部農地企画課	主任	山本貢
	〃	技師	加藤忠敏
	静岡県清水土地改良事務所	主任	杉田隆二
協力	東京農工大学農学部	教授	黒部隆
	駒沢大学	助教授	長沼信夫

目 次

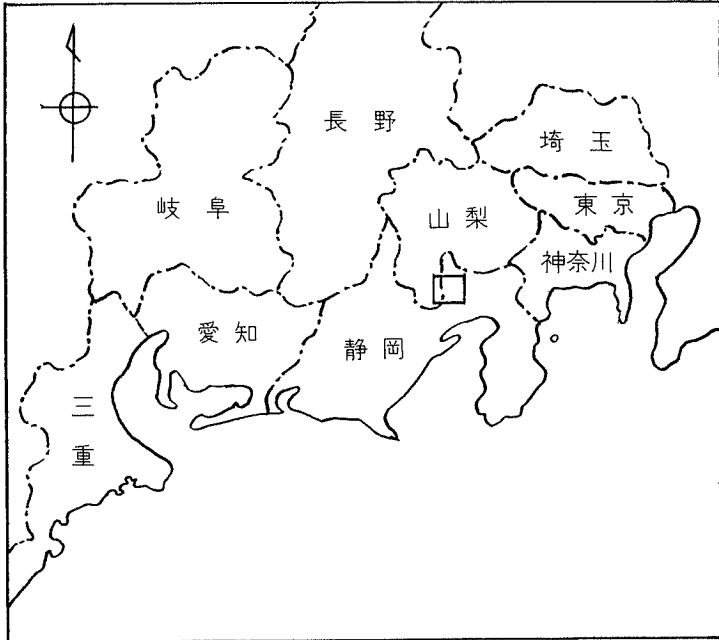
序 文

総 論

I 行政区画	1
II 人 口	2
III 図葉内の地域の特性	2
IV 主要産業の概要	3
V 開発の現状とその方向	6

各 論

I 地形分類図	7
II 表層地質図	19
III 土 壌 図	22
IV 傾斜区分図	32
V 水系谷密度図	33
VI 利水現況図	35
VII 土地利用図	36



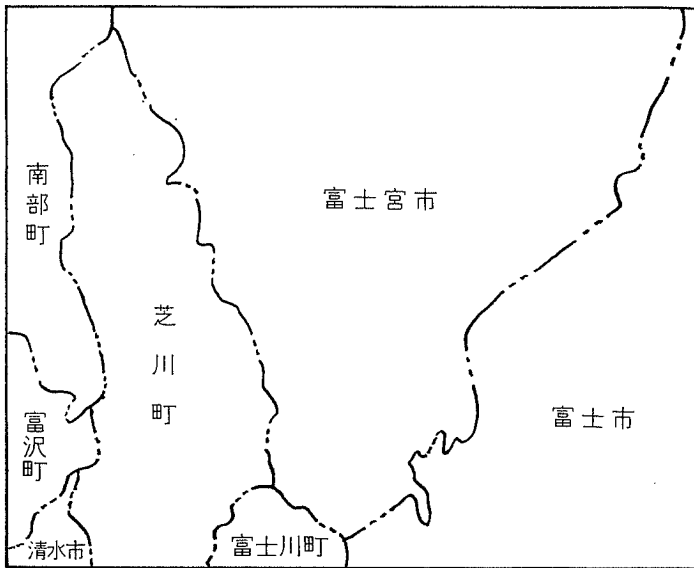
総

論

I 行政区画

- 1 「富士宮」図葉は、東に位置し、経緯度は東経 $138^{\circ} 30' \sim 138^{\circ} 45'$ 、北緯 $35^{\circ} 10' \sim 35^{\circ} 20'$ である。図葉内面積約 $427km^2$ である。
- 2 「富士宮」図葉の行政区画は、静岡県の富士宮市、富士市、清水市、芝川町、富士川町の3市2町と山梨県の南部町、富沢町の2町である。

第1図 行政区画



Ⅱ 人 口

第1表 世 帯 数、

区分		市町村名		富士宮市	富 士 市	清 水 市	芝 川 町
		人 口	男 女 計(A)				
昭和45年	人 口	43,742	91,100	117,553	4,939		
	男 女 計(A)	45,138	89,539	117,413	5,202		
	世 帯 総 数	88,880	180,639	234,966	10,141		
	世 帯 総 数	21,032	43,772	59,352	2,170		
昭和50年	人 口	49,319	99,912	121,204	4,891		
	男 女 計(B)	51,258	99,283	121,845	5,112		
	世 帯 総 数	100,577	199,195	243,049	10,003		
	世 帯 総 数	25,404	51,530	66,127	2,261		
45年 50年 の 比 較	人 口	5,577	8,812	3,651	△ 48		
	男 女 計	6,120	9,744	4,432	△ 90		
	世 帯 総 数	11,697	18,556	8,083	△ 138		
	世 帯 総 数	4,372	7,758	6,775	91		
人 口 伸 び 率 B/A		113	110	103	99		

(注：国勢調査)

Ⅲ 図葉内の地域の特性

本図葉の北部より中心にかけては、草地酪農が盛んであり、中心より東南にかけては、茶栽培を主体に苗木、そ菜、みかん、牧野などが定着している。又、西部および北東部は山林地帯である。

地域開発に重要な役割を持つ交通は、国鉄身延線、東名高速道路、国道52号線、国道139号線、富士宮有料道路等が縦横に結ばれている。

本地域の気象の特色は第2表のとおりである。

人 口

富士川町	南 部 町	富 沢 町	備 考
7,330	3,879	2,703	
7,629	4,058	2,936	
14,959	7,937	5,639	
3,453	1,870	1,282	
8,005	3,691	2,501	
8,257	3,899	2,680	
16,262	7,590	5,181	
3,972	1,886	1,277	
675	△ 188	△ 202	
628	△ 159	△ 256	
1,303	△ 347	△ 458	
519	16	△ 5	
109	96	92	

Ⅳ 主要産業の概要

1 農林水産業

(イ) 農 業

富士山麓南面のゆるやかな傾斜地にある富士宮市の杉田地区より富士市の吉永地区にかけて、お茶栽培を中心に苗木、そ菜、園芸、牧野などもすっかり定着している。

(ロ) 畜産業

富士宮市、富士市の丘陵地域において酪農が盛んである。

(ハ) 水産業

豊かな湧水に恵まれる富士宮市においては養鱒が盛んで、甘露煮や燻製は全国市場でも有名であるばかりでなく、欧米各国にも輸出されている。

第2表 三 島 気 候 表

要 素	単 位	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月
平 均 気 圧	mb	1011.8	1013.0	1012.2	1013.3	1009.7	1006.8
平 均 気 温	℃	4.7	5.4	8.4	13.3	17.5	21.2
最 高 気 温 (平均)	〃	11.0	11.4	14.1	18.7	22.6	25.5
最 低 気 温 (〃)	〃	-0.9	-0.2	3.1	8.3	12.8	17.6
平 均 湿 度	%	69	68	69	74	77	80
平 均 降 水 量	mm	65.7	80.4	135.0	166.4	173.3	266.0
降 水 日 数 > 1mm	日	6.2	6.4	10.4	11.4	11.1	12.5
〃 > 10mm	〃	2.3	2.9	4.7	5.8	6.2	6.9
〃 > 30mm	〃	0.5	0.5	1.0	1.5	1.9	2.9
平 均 風 速	‰	2.6	2.4	2.8	2.9	2.7	2.4
日 照 時 間	h	191.5	169.9	182.6	181.4	185.6	139.6
日 照 率	%	62	55	49	47	43	32
曇 天 日 数	日	2.6	3.9	4.8	5.1	4.8	6.4
霧 日 数	〃	0.5	0.3	0.5	0.6	0.6	0.5
雷 電 日 数	〃	0.3	0.0	0.5	0.5	0.7	0.9
雪 日 数	〃	1.0	2.6	1.1			
積 雪 日 数 > 10cm	〃	0.2	1.1	0.4			
〃 \geq 10cm	〃		0.1				

(㉔) 林 業

一般的な林業経営が行なわれており、経営は大部分が兼業である。

2 商工業

(イ) 商 業

富士宮市においては、近年の交通網の整備、大型店の進出、これに対応した供給機能の量的整備などによって、富士宮市の商業は流出型都市から流入型都市に転換しつつあり、また商業経済圏も隣接する芝川町をはじめとして、富士川町、山梨県南部地

(1941~1970) N.35°06'40" E.138°55'45" H.20.1m

7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	全 年	極 値 起 日	統 計 年 数
1006.6	1007.3	1009.9	1013.9	1015.7	1014.0	1011.2		20
25.0	26.0	22.6	16.8	12.0	7.1	15.0		30
28.9	30.5	27.4	22.1	18.0	13.5	20.3		30
21.9	22.4	19.0	12.4	6.9	1.5	10.4		30
82	82	82	79	77	73	76		30
200.0	221.5	226.3	173.1	115.6	68.6	1891.9		30
11.2	9.9	12.1	10.2	8.4	5.2	114.7		20
4.9	5.0	5.3	5.0	3.5	2.5	54.8		20
2.2	2.5	2.3	1.5	1.0	0.4	17.7		20
2.5	2.3	2.1	2.1	2.1	2.2	24		10
163.8	206.7	149.3	151.3	157.9	181.8	2061.6		30
37	50	40	43	51	60	47		30
4.5	1.9	4.5	5.7	3.8	2.5	50.6		30
0.8	0.7	0.3	0.6	1.2	1.2	7.8		30
2.5	4.1	1.8	1.0	0.4	0.3	13.1		30
					0.2	4.9		30
						1.7		30
						0.1		30

区を包含する広大な購買圏を有するようになり、飛躍的に発展しつつある。

(四) 工 業

豊富な地下水や河川の水資源、あるいは広大な森林をひかえて、古くから、パルプ製紙、紙加工品などを中心とした工業が発達してきました。さらに、富士市及び富士宮市においては、近年の交通網の著しい発展により、京浜、中京の両経済圏の接点に位置する立地条件と具備するに至った両市は、急速に化学工業、機械工業の発展がみられるようになり、今後も良質な水資源と秀でた自然環境を生かした産業の発展が

期待されている。

3 観 光

朝霧高原、富士五湖を結ぶ、国道139号線道路、及び富士山の新五合目に通づる表富士周遊道路が連なっており、国道139号線の沿線には、湧玉池（国指定特別天然記念物）、白糸の滝（国指定名勝天然記念物）、北山本門寺の七本杉（県指定天然記念物）、浅間神社本殿（国指定重要文化財）、大石寺五重塔（国指定重要文化財）、音止の滝等の名勝地があり、近くに東名高速道路富士インターチェンジがあるため、観光の要として発展している。

V 開発の現状とその方向

以上のような地域的特性を受け、本地域の開発の現状とその方向として次の点があげられる。

1 農林水産業

特に農業について、農業人口が減少を続けているが、畑地総合土地改良事業を基軸に農道や排水路の整備が着々と進められ、近代農業をめざし、農業生産額の増大を図るよう、努力が続けられている。

2 商 工 業

工業について、特に富士市及び富士宮市においては、近年の交通網の著しい発展により、京浜、中京の両経済圏の接点に位置する立地条件を具備するとともに、上信越地方にまで経済圏の輪を広げ、急速に化学工業、機械工業の発展がみられるようになり、今後も良質な水資源と秀でた自然環境を生かした産業の発展が期待されている。

商業についても、富士市及び富士宮市を中心に、地元商店の近代化、経営の合理化、駐車場の設置、買物道路の確保、交通条件の整備等に力を入れ、今後の飛躍的な発展が期待されている。

各 論

I 地形分類図

1 地形の概要

富士宮圏幅にふくまれる地域の地形は、東部の富士火山地、愛鷹火山地、西部は天子山地から庵原山地にかけての非火山地、それぞれの山地間に発達する河谷低地からなりたっている。富士火山の発達にともなう火山地形は地域的に特色をもち、構成物質、表層堆積物などの差異は地形的差異にも表現されている。また富士山周辺には構造運動の結果もみられ、断層運動にともなう変位もあらわれている。富士火山を開析する谷は高度によってさまざまな侵食形態や、大沢崩れの末端にあらわれている堆積地形など、比較的短時間における地形変化もみられ、溶岩流出にともなう原地形の特性とともに地形的に変化を与えている。山麓における土地利用や集落の発達も、水系の状況や土壌層の堆積とも関連して、一般に乏水性の火山裾野にみられる湧水や河川との結びつきも、興味ある地域となっている。

西部をしめる天子山地、庵原山地は富士山の周辺をとりまく第三系山地の一部であり、構造的には南北方向の傾向に支配されている。大起伏山地の場合は山腹崩壊もおおく、災害発生もみられ、安政地震の時に発生した白鳥山北斜面の大崩壊は、富士川のダムアップもあわせて大きな災害となった。南部にあらわれる岩淵火山地と鷲の田礫層からなる丘陵は侵食と解体がすすみ、谷密度も高い。なお、東南部に一部愛鷹火山がみられるが、比較的緩斜面の放射状にのびる尾根の末端と放射谷があらわれ、侵食のすすんだ火山の特性をあらわしている。赤淵川は愛鷹火山と富士火山の境界を南流する河川であるが、段丘、早瀬、滝など小規模ながら多様な河谷地形をもっている。また須津川は広い河谷を埋積して扇状地性の堆積地形ををみせているが、流路は下刻し、新しい段丘地形を発達させている。河床の礫質堆積物もおおく、土石流的に送流されたものであり、二次的流出の可能性ももっている。

丘陵は富士火山地の西南部をとりまくように、新富士溶岩からなる地域、古富士泥流堆積物からなる地域ともにみられ複雑な形態をもつが、星山や羽耐丘陵の発達には断層運動の影響が大きく落差を生じている。山麓地と丘陵との中間的の性質をもつ山麓扇状地は溶岩原上に二次的に堆積した物質よりなり、新期の大沢、相対的に古い万野原、大淵などがあり、同心円状の等高線の配列が扇状地の性質をあらわしている。

低地のしめる面積はすくなく、富士川の堆積による岳南低地のほかは富士川本流ぞい、芝川、潤井川、稲子川、稲瀬川など、支川の谷底の堆積地がみられる。芝川と潤井川は富士山の溶岩流に支配される流路をとり、溶岩流の上に沖積層をのせるように発達した低地であり、勾配も比較的大きい。湧水もあわせて水量にめぐまれているために水田化がすすみ、溶岩原（台地）からなる畑地の土地利用と対照的である。芝川、潤井川ともに早瀬や滝が流路にそってみられ、岩石に支配された河谷地形を示すとともに芝川の水は発電用水にも利用され、古くから開発がすすめられてきた。なお富士山麓一帯は開発行為がすすみゴルフ場、宅造、採石場などが人工改変地となっている。

2 地形区

本図葉の地形区については、海拔高度、起伏量、谷密度、傾斜分布、地形面の性質、構成物質、地域的なまとまりなどを基準にして次のような区分をおこなった。

Ⅰ 山 地	a 庵原山地	1 中河内山地 2 浜石岳山地
	b 天子山地	1 天子山地主部 2 白水山山地 3 天子山地南部
Ⅱ 火 山 地	a 富士火山地	1 富士火山地主部 2 富士火山南部山麓地 3 富士火山西部山麓地
	b 愛鷹火山地	
	c 富士火山山麓扇状地	1 大沢扇状地 2 万野原扇状地 3 大淵扇状地
	d 富士火山西南部丘陵地	1 白糸丘陵 2 西山羽鮒丘陵 3 星山丘陵 4 村山丘陵
	e 岩淵集塊岩地	
Ⅲ 丘 陵	a 鷺の田丘陵地	
Ⅳ 低 地	a 岳南低地	1 富士川扇状地 2 富士川扇状地縁辺部 3 須津川扇状地
	b 富士川本流河谷低地	
	c 稲瀬川河谷低地	
	d 稲子川河谷低地	
	e 芝川流域低地	
	f 潤井川流域低地	
	g 下条低地	

3 地形分類

庵原山地 (I a)

富士川以南にある非火山地を庵原山地とし、稲瀬川河谷を境に中河内山地(I a1)と浜石岳山地 (I a2)に区分した。岩渕火山地との境界は入山断層の延長をもってそれにあてている。この山地は地質的に富士川層群、浜石岳層群の礫岩、砂岩、泥岩、頁岩などからなり、起伏の大きい山地であるが、特に白鳥山周辺は急斜面で富士川に接している。また断層や破碎帯にそう地域の地すべり、泥岩の風化にともなう粘土化と軟弱化などは山地災害のおこりやすい条件となっている。白鳥山は地質的には富士川層群からなっており、砂岩と頁岩の互層で割れ目がよく発達している。安政地震の時、北斜面に大崩壊が発生し、富士川をせきとめる災害を発生させたが、崩壊土砂量は $5.65 \times 10^6 \text{ m}^3$ と推定されている。境川ぞいや清水市原原は谷密度が大きく、水系の発達がいちじるしい。水系にそう小谷底地や崖錐緩斜面や平坦地に集落が立地し、それらの小地形は構造的に発達したあとを示している。

天子山地 (I b)

図幅の西部をしめ、富士川以北の山地を天子山地として区分した。この山地の北部は毛無山地とよび、天子山地とあわせて天守山地とよぶこともあるが、本図幅では天子岳以南がふくまれる。起伏量、水系等をもとにして、天子山地主部 (I b1)、稲子川以西の白水山を中心とする白水山山地 (I b2)、起伏量の小さい部分を天子山南部 (I b3) に細分した。第三紀中新世の造山運動によって形成された山地で、第三紀層からなっている。富士川層群にぞくする地層からなり、天子岳はそこに貫入した閃緑岩や玢岩などの岩体からなり、貫入にともなう隆起にともなって形成された。東麓には富士噴出物が達しているが、境界にそって小扇状地や崖錐ができています。天子ヶ岳を中心に大起伏山地がみられ、山頂平坦面周辺の傾斜変換部には崩壊地形も発生している。稲子川以西の山地は白水山地と区分したが、南北に走る尾根を中心に西側は佐野川流域にぞくする。白水山は富士川層群を貫入した石英閃緑岩、閃緑ヒン岩の岩体からなり、地層は変質をうけて断層も発達している。佐野川はV字状の深い溪谷をつくり侵食地形には特色がある。佐野川をせきとめて作られた天子湖は柿元ダムによって湛水され、発電用水源となっている。白水山一帯は急斜面の起伏の大きい山地であるが、稲子川をへだてた天子山地南部は小起伏山地であり、構成岩石も浜石岳礫層からなっている。野下断層をさかいに岩相が変化するが、地形の上

にも差異ははっきりあらわれている。富士川本流に接する芝川町の中心部の周辺には楠金段丘をはじめ、段丘礫層が分布している。

富士火山地 (Ⅱa)

富士火山は傾斜、起伏量、構成物質等をもとにして富士火山地主部 (Ⅱa1)、富士火山南部山麓地 (Ⅱa2)、富士火山西部山麓地 (Ⅱa3) の3地区に区分をした。図幅内には富士火山の西南部がふくまれており、地形的にいくつかの特色をもっている。富士火山地主部は大起伏、中起伏の火山地にあたり、ほぼ同心円状の等高線をもつ地域であり、新富士溶岩流上に火山灰や火山砂礫のおおっている地域でもあり、ガリー状の谷が斜面を侵食し水系を発達させているが、その連続性は乏しい。白塚、檜塚、二子山、西白塚 (1292) をはじめいくつかの寄生火山もみられ、噴石丘や溶岩流をとまなうものなどもあり、噴火口の形態を示す例もある。

西白塚は山頂に火口跡の凹地をもち、そこから流出した溶岩流は700~800mの山腹まで達し、高八山 (1649) も一段と急な斜面で囲まれているために寄生火山と考えられ、頂上部は西側に凹みをもつ半円形を画く尾根を形成し、火口跡を示している。

南部山麓地はゆるい勾配をもって裾野を展開しているが、斜面の断面をみると階段状の地形を示すとともに起伏にもとんでいる。それは溶岩流流出後の侵食による変形もあるが基本的には溶岩流の重なりあいと、溶岩流の先端の台状地形が裾野の微地形となって表現されているといえる。大淵、今宮、曾比原、勢子辻、大坂、入山瀬などの溶岩流が流出しその流動性の差異や新旧関係によって原地形は形成されている。もっとも新しいのが丸尾溶岩であり、大淵丸尾とよばれる。これは標高970m地点の寄生火山の噴出物であって、この寄生火山は東西100m、15mの深さの火口底をもつ。大淵丸尾は噴火口から今宮浅間神社まで全長13.5km、幅は約1km、層厚は丸火自然公園のあたりで約15mをもち、流出にとまなう溶岩原を形成している。噴出年代はB P 1750±70年とされている。

山麓地は微地形的にみると溶岩流によって形成された特色がみられ、富士市中野、大淵付近は起伏の大きな溶岩台地からなる代表的例である。溶岩流の末端部は比高10m程度であるが急崖部になっており、その形から舌状にはり出した流出状況が理解できる。一般に階段状に低下するが、末端部のせりあがりによる逆傾斜の場合もあり、孤立丘やショールドームとよばれるものができることもある。久保や森の地名もおおく、凹地の成因については、第1は溶岩流によって周囲が閉塞された盆地状のもの、第2は平行する溶岩流の

間に形成された谷状の凹地で、溶岩流が末端で停止し側方に拡大する時に排水口のせまい盆地状の形態となるもの、第3は溶岩流の台地を開析した谷の谷頭部にあたるもの、第4は溶岩流そのものの凹地で固結とともに生じた場合などで、凹地は土壌の集積の結果、畑地として利用されることがおおい。

西部山麓地は北山一帯から天母山にかけての地域にあたり、山麓扇状地にかぎられる範囲であり、南部山麓地より土地利用、水田化は進行している。構成岩石は北山溶岩と二子山から流出した天母山溶岩、島状に分布する旧期溶岩をおおう扇状地状堆積物などからなり複雑である。

愛鷹火山地（Ⅱb）

図幅にふくまれる愛鷹火山地はその南西部の一部であり、赤沢川は富士溶岩からなる裾野との境界となっている。愛鷹山は開析がすすみ、放射状の尾根と水系に特色をもつが、その西端の一部が図幅にあらわれている。谷は埋積がすすみ、河谷低地あるいは扇状地状の地形となるが、流路は下刻することがおおい。

富士火山山麓扇状地（Ⅱc）

富士山麓には火山砂礫層の二次的堆積物からなっている扇状地性地形が発達しており、裾野扇状地ともよばれる地形である。図幅中には、大沢扇状地（Ⅱc1）、万野原扇状地（Ⅱc2）、大淵扇状地（Ⅱc3）の三地区にみられ、等高線の配置、水系、谷密度、堆積物などをもとに周辺と区別される。成因的には裾野原面を刻む谷が下刻と側刻によって裾野原面を広く削削し、一方ではそこに堆積物が一時的な出水によって堆積した過程が想定されている。

大淵扇状地は、大淵の穴原から厚原、傘木にいたる平面的に細長い三角形をした扇状地性の地形は大淵砂礫層とか大淵溶岩上の扇状地堆積物として注目されてきた。基底の溶岩である今泉溶岩と岩淵溶岩上の堆積物は、下部は角礫をふくむ凝灰角礫岩、ついで砂層と成層した粗粒砂層火山礫と粗粒砂の互層などからなり、10~20mのあつさに達している。扇状地の周辺は溶岩流の台地や丘陵などにかこまれ、その境界には凡夫川、不動沢と伝法沢が流下している。また周囲の溶岩流や泥流の地域の等高線は不規則で出入りのはげしい形であるのに、扇状地面はほぼ同心円状の屈曲のすくない等高線の配列をみせている。また周辺と接触する部分は相対的にひくく流路の位置になっている。この扇状地は穴原、厚原などの地名が示すように原野であり、土地利用や開発もおこなわれていた地域である。扇状

地の西側を流れる伝法沢や不動沢、凡夫川は富士南斜面では比較的大きな河川であるが、扇状地を形成するには規模は小さく、この扇状地は過去の別の河川によって堆積が進行したものであると考えられている。

富士山の西斜面に発達し、下流に影響を及ぼしつつある大沢崩れは潤井川の上流部に相当する。火山の開析にともなう谷の発達はさまざまな形態をもつが、大沢は玄武岩溶岩とスコリアとの互層からなる斜面を流下する。未固結のスコリアと不安定な溶岩層とは崩壊をくりかえし、崩落物質は末端に扇状地を形成するが、上井出のあたりを末端とする。地形変化はおもに集中豪雨による土石流的移動であり、推定によると現在までに削りとられた土砂量は5,000万 m^3 、最近では1959年に10万トン、1972年に約48万トンの土砂流が発生した。大沢にはじめて谷の発生したのは約3,000年前と推定され、谷頭部に大崩壊を生じて、土砂生産量と運搬量のふえたのは約1,000年前と推定されている。図幅には大沢の流路にそって土砂流出をとめる堰堤が図示されており、下流への被害を防止しているが、洪水時の流出土砂量は前述のようないぢるしく、大沢扇状地は現在形成されつつある活扇状地であるともいえる。

万野原扇状地は新旧の溶岩流にかこまれた位置をもち、富士宮市街地をのせている。緩斜面をもつ平坦地で、等高線の配置からは同心円状の特色をもち大沢扇状地的である。

富士火山西南部丘陵地 (Ⅱd)

富士火山と天子、庵原山地との間には、古富士集塊質泥流層や新富士溶岩からなる丘陵や溶岩原が分布するが、白糸丘陵 (Ⅱd1)、西山羽鮒丘陵 (Ⅱd2)、星山丘陵 (Ⅱd3)、村山丘陵 (Ⅱd4) の4地域に区分でき、それぞれ構成物質や地形に特色をもっている。

星山丘陵は大宮断層、入山瀬断層、安居山断層などの直線状の境界線と、富士川河谷にかこまれる四辺形をなし、幅2～3km、長さ5～6kmの規模をもち最高点は白尾山の237m、明星山は225mを示すが、全体的に波浪状の平坦面がひろがっている。大宮断層は北からの断層であり、西端で65m、東で100mほどの落差をもち、崖下には崖錐、段丘などの発達もみられる。古富士泥流層を切っているのだから、断層の形成時は新富士火山活動以前と考えられる。入山瀬断層は丘陵の南部をきる断層で、形成時は大宮断層とほぼ同時代である。いずれも急崖をなして平地に接するが、その延長については問題がおおい。星山丘陵は、その形成過程において小断層によってブロック化され傾動運動をおこなったようすが、傾斜変換線や水系の特色によって示されている。平行して丘陵を横断する谷は化石谷的性質を

もち星山、貫戸などの谷底には3段の段丘が発達している。岩本山周辺にも岩本段丘、万野段丘がみられる。

羽鮒丘陵は星山丘陵より約100mほど高く、東は安居山断層崖が約30°の傾斜で富士宮にのぞむが、西側は約10°の緩傾斜で芝川の谷におちている。南は富士川本流の峡谷に面しているが、平野、楠金を中心に段丘が3段にわたり発達し、礫層は50mのあつきをもっている。北方は上条付近で新富士溶岩の下に埋没して低地に移行するが、その延長は島状に断続してあらわれてくる。羽鮒丘陵は200~300mの高度をもち、星山丘陵とはかつてひとつづきであったものが安居山断層の活動によって分断化され、100mほどの高度差を生じたものと考えられている。両丘陵とも岩渕火山群噴出物である安山岩質集塊岩が、丘陵内に突出して丘陵の面よりも一段と高い地域を構成することになり、星山丘陵では突相寺裏の山地、明星山、羽鮒丘陵では320mの山地がそれにあたる。

白糸丘陵は大沢扇状地と天子山地との間に位置し、古富士泥流層、新富士火山の芝川溶岩流、白糸溶岩、横手沢溶岩などの流下する溶岩台地性の地域をさしている。白糸滝、音止の滝など造瀑層の分布、芝川水系の表流水と伏流水の作用など複雑な構造が風景をつくり出している、大倉川ぞいには防災ダムが構築されている。

村山丘陵は元村山から大岩、杉田方面にのびる古富士泥流層からなる丘陵性の台地で谷は深くガリー状に発達しており、水系は複雑に発達し、起伏も大きいのが特色で、南部は西原泥流台地ともよばれる。泥流台地は地形面の区分が可能であるが、Ⅰ面は約3~5万年前、Ⅱ面は1.7~1.9万年前の堆積と想定されており、西原付近の150~220mの高度はⅡ面に相当するものである。

岩渕集塊岩地(Ⅱe)

岩渕火山は洪積初期まで活動していた火山である。集塊岩地は侵食のすすんだ地域で、鶯の田礫層や別所礫層がそれをおおっていたが、削剝されて露出しているために、分布としては鶯の田丘陵をとりまくように分布している。また富士川左岸では岩本山、明星山、羽鮒丘陵南部の320mの山地などが岩渕溶岩からなる地域となっている。

鶯の田丘陵地(Ⅲa)

鶯の田丘陵は固結度の弱い鶯の田礫層からなり、松野南部一帯の標高100~400mの比高の小さい斜面からなる丘陵性の地域である。開析がすすみ、谷密度は高くなり、水系の平面形は樹枝状を示すが、頂部にはなだらかな平坦面が分布して集落も立地していることも

ある。鶯の田礫層は砂岩や閃緑岩の円礫からなる礫層であつさは150~200mほどであり、岩渕安山岩体の上に不整合にのっている無層理の洪積礫層である。また羽鮎、星山丘陵の周辺にみられる砂と礫との互層からなる堆積物は別所礫層とよばれ、洪積前期末のもので鶯の田礫層に対比され、小笠期のもつとされている。谷の断面はV字状に発達し、谷壁斜面には崩壊しやすい礫層が露出しており、谷底には崩落した堆積物が堆積して、斜面崩壊とともに二次的流出の可能性をはらんでいる。鶯の田礫層は山砂利採取の対象となっており、きりとりによる採石場は人工改変地になっている。

岳南低地(Ⅳa)

富士川下流の低地を岳南低地とよび、図幅にはこの低地の北部、位置的には頂部にあたる部分がふくまれるが、この低地はさらに南部の富士川河口から東部に展開する帯状の低地を形成している。図幅にふくまれる低地は富士川扇状地(Ⅳa1)、富士川扇状地縁辺部(Ⅳa2)、須津川扇状地(Ⅳa3)に区分される。

富士川扇状地は星山丘陵南端岩本付近を扇頂として広い扇面を形成して南東方向にむかうが、砂礫層からなる高燥な地形が溶岩流をおおっている。扇状地には旧流路跡があり水流が一時的に流下したあとを示し、全体的には網目状に発達している。形態的には溝状に発達する凹地で洪水時には水流の流路となるのが一般的である。扇頂からはいわゆる雁堤とよばれる甲州流の逆L字型の堤防が構築され、その一部は図にふくまれる。この工法は扇状地を流下するあれ川に対処する方法をもって作られ、富士川の乱流と洪水を防ぎ、新田開発をすすめる契機となった。1612年以降古郡孫太天重高をはじめ、3代、約60年をかけて完成された堤防である。

扇状地の東側には潤井川にそう扇状地縁辺部の地形があるが、これは軟弱な地層からなる低湿地への移行部であり、砂礫層とともにシルト、粘土層などもあつくなる部分である。低湿な三角州的性質をもち、後背湿地的な位置にあたるために、はんらん時には湛水、集水場所であり、水田地帯となっている。星山放水路の完成ではんらんの危険性はすくなくなり、都市化の進行にともない、盛土によって工場や住宅地に改変されつつある場所がおおい。

須津川扇状地は愛鷹火山から南流して浮島低地に流下する須津川ぞいに発達する堆積地で、火山開析谷を埋積するような形で発達した地形である。地形的には埋積谷を河川がさらに下刻しているために段丘状の形態を示すが、下流方向にむかってかなり傾斜しており

図幅にはふくまれないが、南側は浮島低地にむかって扇状地の形をとっている。河床堆積物の状況から判断して粗大な礫があつく堆積していることが知られ、流下砂礫量のおおかったことが知られる。1976年8月9日の集中豪雨は300mmほどの降水量をこの地域にもたらししたが、須津川とその西側の赤淵川では水流が鉄砲水状に流下し、多くの被害を与えたが、河床堆積物も土石流となって流下している。愛鷹山南西麓の土地利用の変化が保水機能を失わせ、流出量と流出率の増大をきたしたことが報告されている。

富士川本流河谷低地 (IVb)

富士川は曲流をくりかえしながら南東流し、岩本付近から山地をはなれるが、それまでは山間を流下し、多量の砂礫を運搬堆積させ、広い河床を形成している。河床の礫は骨材として採取され、過剰採取のため河床低下が問題となった。万沢、松野、芝川あたりでやや広い谷底低地がみられるが、いずれも袋状の堆積地のような位置にあり、その下流部は急傾斜の谷壁斜面をぬう流路となる。松野付近の低地は、松野断層による相対的かんぼつ運動の結果形成された盆地状の地形と考えられ、その凹地を埋積した過程をみることができる。周辺は有無瀬川や血流川からの堆積物からなる扇状地や崖錐、小さな段丘からなり富士川ぞいには、芝川溶岩流の溶岩台地が崖によって区切られているために段丘状の地形となっている。この平坦面上は改変されて工場や宅地になっている。なお流路ぞいには小規模の段丘が点在している。

潤井川低地 (IVf)

潤井川低地は、南西部は星山羽耐丘陵と大宮断層によって境され、北東部は富士山麓の溶岩流地に接する細長い形態をもっている。潤井川ぞいの堆積作用によってできた平野であるが、勾配が大きいで扇状的性質ももっている。入山瀬付近で南西流してきた溶岩流が星山丘陵のふもとで沖積地をせきとめるように分布するのも特色である。潤井川の源流は富士大沢崩れであることから送流土砂量はおおく、支流から運搬される土砂量とあいまって埋積が進行した過程が想像される。河床は高く、自然堤防も小規模にみられることから、はらんもくりかえされてきたようである。洪水量調節のための星山放水路が49年に完成して黒田から富士川本流へ通じたため、流量を安定させる機能ははたされた。なお流入する河川の水源は湧水起源の場合もおおく神田川などはその例である。

その他の低地についてみると、稲瀬川 (IVc)、稲子川 (IVd) とともに急斜面にかこまれた細長い河谷低地であり、小規模の沖積地、崖錐性の緩斜面、小段丘状の地形からなる低地で

あり、水田や畑地、集落の立地条件を与えている。一般に礫質からなる埋積地である。芝川流域低地(Ⅳe)と下条低地(Ⅳg)は溶岩流に限定された盆地状ともいえる平面形をもつが、いずれも沖積層は溶岩流をおおうように堆積し、はんらんのかきかえしで形成された低地であろう。ほとんど水田化されているが勾配があるため、段化されている場合がおおい。また芝川右岸は段丘地形の発達が見られるが、その面の区分や対比は不詳である。両地区とも基本的には溶岩流によって原面が形成されているために低地という区分に該当させることは妥当でないかもしれないが、表層物質と流路ぞいに発達した平坦な堆積作用の及んでいる地区という点をもとにして低地として区分した。山地と低地の間に位置する小支谷の出口にはいずれも小扇状地ないし崖錐が山麓の緩斜面を形成している。

4 起 伏 量

起伏量は国土地理院発行、縮尺5万分の1地形図の各辺を20等分してえられる各方眼内の最高点と最低点との標高差を下記階級区分によって表示したものである。各階級の区分とひろがりをもとにして山地や山麓地の地形分類や地形区分をおこなった。

0	50m未満
1	50~100m
2	100~150m
3	150~200m
4	200~300m
5	300~400m
6	400~500m
7	500m以上

6	6	7	7	5	4	0	1	1	2	2	4	4	3	4	5	6	7	7	5
5	6	5	8	5	4	1	0	1	2	2	3	3	4	4	4	5	4	5	5
6	5	5	7	5	3	1	1	1	1	2	3	3	4	4	4	5	4	4	4
5	6	6	6	5	5	1	0	1	1	2	3	3	4	4	4	5	4	4	4
6	5	6	6	6	6	1	0	1	1	2	3	3	4	4	4	4	2	3	4
6	5	6	6	5	4	2	0	1	1	2	2	2	3	4	4	4	3	2	3
7	5	5	6	3	4	0	1	0	1	2	2	2	3	3	3	4	2	2	3
7	5	6	5	4	4	0	0	1	1	3	2	2	2	3	3	4	3	3	3
7	5	6	5	4	1	1	0	1	1	1	1	2	2	2	2	3	3	2	3
7	7	6	5	4	2	2	0	1	1	1	2	2	0	2	2	2	2	2	2
5	7	7	4	4	2	2	2	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2
4	5	5	5	5	1	2	2	0	1	1	1	1	1	1	0	2	2	2	2
4	5	5	5	5	1	1	2	0	1	0	1	1	1	1	2	2	2	2	2
5	2	2	4	5	3	2	3	0	0	0	1	1	1	2	1	2	1	2	2
4	2	6	5	4	3	3	2	2	0	0	1	1	1	1	1	2	2	2	3
4	3	5	6	3	2	4	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	4
4	4	5	4	2	1	4	2	1	2	1	1	0	1	1	1	1	1	2	4
3	4	4	4	3	4	3	0	1	2	1	1	0	0	1	1	1	1	3	4
5	4	4	4	4	4	4	4	1	3	2	1	0	0	1	1	0	1	2	4
4	4	3	3	4	4	4	4	4	4	3	1	0	0	0	0	0	2	2	2

5 道路と河川

東名高速道路

国道52号, 139号

表富士周遊道路

富士宮有料道路

主要地方道 富士七色石裾野線

富士宮芝川線

富士川身延線

<一級河川>

富士川水系……富士川, 稲子川, 稲瀬川, 芝川, 潤井川, 星山放水路, 血流川, 有無瀬川, 大倉川, 須津川, 赤淵川, 滝川, 伝法沢川, 和田川, 五斗目木川, 猪の窟川, 柚

野布沢川，凡夫川，弓沢川，神田川，風祭川，足取川，内房境川，廻沢川，佐野川，
入川，猫沢川

(北川光雄)

<文献>

- 上野忠行(1978)土地利用の変化と都市型水害 地理月報 250, 251号
国土地理院(1978)富士地区土地条件調査報告書
静岡県(1965)富士山および岳南地域の防災上の問題
静岡県(1973)静岡県地質図(説明書共)
静岡県(1976)土地分類基本調査「吉原・駒越」
静岡県(1978)土地分類基本調査「御殿場」
津屋弘達(1968)富士火山地質図
富士市(1969)富士市史(上)
富士市(1972)吉原市史(上)
富士市(1974)富士愛鷹山麓地域の自然環境保全と土地利用計画調査報告書
町田洋(1977)火山灰は語る 蒼樹書房

Ⅱ 表層地質図

1 概 要

本図葉は庵原山地北東縁部とそれから北へつづく天子山地が西側の約 $\frac{1}{4}$ を占め、富士山南西麓が残余の大半にひろがる。その間に古富士火山噴出物からなる丘陵と沖積平地が細長くのびる。したがって、庵原山地の大部分と天子山地が新第三系から成るほかはすべて第四系で、しかも、火山岩類と火山碎屑物が多くを占める。

2 未固結堆積物

本図幅内の未固結堆積物としては、沖積層、扇状地堆積物、段丘堆積物、それに火山灰層と噴石丘である。火山灰層などは火山噴出物の項で述べる。

沖積層：沖積層は富士宮市街ののる潤川流域、芝川流域、富士川流域にそれぞれ狭く細長く分布するが、上記河川は勾配も大きいため、砂礫層が大部分を占め、潤川流域の後背湿地の一部に、柱状断面図に示したように、厚さ数 m 以下の泥層がはさまれる部分がある。

扇状地堆積物：富士山麓に北から、上井出、富士宮北東の万野原、それに厚原の3地域に分布する。上井出北方では堆積物の厚さ $8m$ で富士山本体溶岩をおおうが、他地域では末端部で厚さ $20m$ 以上あり、火山性の砂礫を主とする。

段丘堆積物：段丘は芝川流域と潤川流域に天子山地、羽鮒丘陵、星山丘陵の裾を縁どって分布する。このほか、愛鷹火山の開析谷にも狭く限られて分布する。これらも当然のことながら火山性砂礫質から成る。

3 半固結堆積物

ローム層：風化した火山灰層で愛鷹火山の山麓に分布する。厚さ $10m$ 以上に達するところもある。

鷺ノ田・別所礫層：富士川下流南岸の岩淵丘陵の表層をおおうものを鷺ノ田礫層、羽鮒丘陵・星山丘陵の古富士火山噴出物の下位に分布するものを別所礫層と呼んでいるが、両者は一連のものである可能性が高い。下部の一部は後述する岩淵火山岩類と指交する。何れも大部分は河成礫層で層厚は鷺ノ田で最大 $200m$ に達する。鷺ノ田礫層はこの地方の高位段丘堆積物の一つとされる。

4 火山噴出物及び火山岩類

富士、古富士、愛鷹、岩渕の各火山の噴出物と火山岩類にわけて述べる。富士火山は沖積世に、他の火山は洪積世に活動した。富士火山体の表面をおおう火山灰や寄生火山噴石丘は未固結堆積物ではあるが、便宜上ここで述べる。

富士火山噴出物

火山灰など（未固結堆積物）：火山灰、火山砂礫は東隣の御殿場図幅と異なり顕著ではない。富士山体の中腹以上に分布する。厚さは10m以下。

寄生火山噴石丘（未固結堆積物）：火山砂礫、火山弾などが寄生火山の火口の周囲に持って円錐丘をなしたもので、岩片としては固いが岩体としては崩れやすい。

寄生火山溶岩（固結堆積物）：寄生火山に伴う溶岩で玄武岩から成る。

本体玄武岩溶岩（固結堆積物）：富士火山本体をつくる玄武岩溶岩でカンラン石玄武岩が多い。噴出時期により旧期、中期、新期溶岩に3大別される。本図幅では富士山体及び芝川、潤川沿いに分布する。

古富士火山噴出物

火山砂礫及び泥流（固結堆積物）：天子岳東麓の芝川沿岸や、羽鮒丘陵・星山丘陵といった小高い丘陵をなして分布する。津屋（1968）によると富士宮北東の富士山体斜面にも露出して見られる。古くから古富士泥流と呼ばれてきたもので凝灰岩、凝灰角礫岩など火砕岩類から成る。

愛鷹火山噴出物

凝灰角礫岩（固結堆積物）：愛鷹火山は溶岩と碎屑物とが互層をなして累重する成層火山で、古期の玄武岩、凝灰角礫岩と山頂部の新期安山岩類に大別できる。本図幅には愛鷹火山体の西麓の一部が見られ、主として凝灰角礫岩から成る。

岩渕火山岩類

火山角礫岩及び溶岩（固結堆積物）：富士川下流南岸の岩渕丘陵と同北岸の羽鮒丘陵・星山丘陵の基部を構成し、火山礫岩、一部は溶岩から成る。

5 固結岩類

浜石岳層群・“天子岳層”：南隣の吉原図幅の浜石岳から北方へ天子山地南部まで分布する、主として成層した礫岩層から成る新第三系を浜石岳層群と呼び、天子岳をつくる礫岩がらの地層を“天子岳層”としてある。両者ともゆるやかな向斜構造をなし、淘汰度、円

磨度も比較的高く海成層と考えられる。浜石岳層群の地質時代は浮遊性有孔虫化石から鮮新世で、東西両縁を衝上断層で截られる。“天子岳層”についてはほぼ同時代と考えられるが未詳である。

小河内層群・上稲子層・佐野層：浜石岳層群の下位に分布する泥岩勝ち新第三系を小河内層群，“天子岳層”の下位に分布する泥岩・及び砂岩，泥岩を上稲子層，断層をへだてて天子湖の西側に分布する泥岩勝ちの地層を佐野層と呼んでいる。泥岩のため一般に構造がわかりにくい，ところにより強く褶曲する。地質時代は中新世後期と考えられる。

貫入火成岩類：“天子岳層”を貫き，天子岳山頂部に露出する安山岩溶岩と，上稲子層に貫入して，細長く南北に露出する斑岩，閃緑岩，閃緑玢岩及び玢岩がある。

(土 隆 一)

<文 献>

沢村孝之助(1955)地質図幅“沼津” 1:75,000

及び同説明書。地質調査所。

土 隆一編(1974)静岡県地質図 1:200,000

及び同説明書。静岡県。

津屋 弘 達(1968)富士火山地質図 1:50,000

及び同説明書“富士火山”。

Ⅲ 土 壤 図

1 岩石地

土壤層がなく、基岩が露出している。本図幅では天子山地の白水山周辺西斜面分布するにすぎない。

2 高山岩層土壤

主として森林限界周辺およびそれ以上の山腹斜面に分布する(A)C断面をもつ土壤で、(A)層の発達は著しく弱くかつ浅い。これに属する土壤統は富士山1統で、宝永スコリアで認められ、図幅北東部の高海拔地帯(2300m以上)にみられるが、図幅内の分布は少ない。

3 岩屑性土壤

(A)C断面をもつ土壤で、(A)層の発達はやや弱いのが、概して深い。一般に表層部は石礫が少ないが、下層は石礫質の未固結堆積物で占められている(林野土壤分類のIm-clに相当する)。これに属する土壤統は鷺ノ田2統で、富士川町北部および芝川町内房周辺の蒲原丘陵地の北斜面に分布し、主としてヒノキ人工林として利用されている。

4 残積性未熟土壤

多少にかかわらず浸蝕の影響がみられる(A)C断面をもつ土壤である。腐植の滲潤が少なく、暗色を呈する(A)層の発達は弱い。下層は暗褐色を呈する薄いB層と黄褐色を呈するC層からなるものが多い。これに属する土壤統は鷺ノ田1統(Im-cl)で、鷺ノ田2統の分布域に出現し、主として、ヒノキ人工林、天然広葉樹林を形成している。小葉山統は、固結堆積岩風化物を母材とするもので、天子山地、庵原山地とその西側の山梨県下の山地に分布し、普通畑と茶園に利用されている。中沢統も固結堆積岩風化物を母材とするものであるが、小葉山統に比べ土壌体の部分が薄いもので、(A)層の土性は小葉山統が細粒質であるのに対し中沢統は中粒質である。柿元統は、固結火成岩風化物を母材とするもので、天子湖西岸の山地斜面に分布し、普通畑に利用されている。

5 粗粒残積性未熟土壤

多少にかかわらず浸蝕の影響がみられる(A)C断面をもつ土壤である。腐植の浸潤が少なく、わずかに暗色を呈する(A)層の発達が弱く、かつ浅い。これに属する土壤統は、上井出統(Im-C)で図幅北部の大沢扇状地に分布し、原野もしくは天然広葉樹林を形成している。下稲子統は、固結堆積岩風化物を母材とするもので、天子山地山麓の一部に分布し普

通畑に利用されている。島並Ⅰ統は、固結水成岩の崩積性堆積物と黒ボクの混合物を母材とするもので、天子山地南麓の一部に分布し、普通畑に利用されている。

6 粗粒火山抛出土未熟土壌

火山爆発にともない山体の一部が破壊されて生じて岩屑および火山砂礫、火山灰がそのまま堆積したか、または雨水、河川水などと混じて流動して堆積したものを材料とした(A)C断面をもつ土壌である。(A)層は発達が弱く、かつ浅い。これに属する土壌統は富士山2統、富士山3統および今宮3統(いずれもIm-G)で、三者とも富士山の南斜面に分布している。富士山2統は高海拔地帯(2000m以上)にあって、H層もしくはH-A層を形成するが、肉眼ではポドゾル化はみられない土壌で、主として天然針葉樹林を形成している。富士山3統は褐色森林土壌、今宮3統は黒ボク土壌の分布域内にあって、いずれも下層にマルビ熔岩を介在する土壌で、1/20万の土壌図では岩石地となっているが、A層の発達状態から本土壌群に包含した。両統とも天然広葉樹林およびヒノキ人工林を形成している。

7 厚層黒ボク土壌

これは土色の明度、彩度ともに2またはそれ以下の黒色ないし黒褐色の腐植に富む表土層(黒ボク層)が50cm以上の厚さをもつ土壌である。これに属する土壌統のうち、稗久保統は羽鮎丘陵に分布し、土性が細粒質で下層に20cm以下の薄いスコリア固結層を有するもので、普通畑や茶園に利用されている。川合田統は、芝川と富士川の合流点に当る河岸段丘上に分布し、土性は細粒質で、普通畑、茶園に利用されている。

愛鷹3統は、「沼津」「御殿場」図幅での土壌名を踏しゅう。厚い黒ボクA層の下位に、ち密、粘質な暗褐～褐色B層がくるもの。これは愛鷹フォーム層の上部である。主として、愛鷹山に分布する。みかん園、普通畑、茶園として利用されている。

次郎長統は、厚い黒ボクA層の中～下部に、黒褐色、風化したスコリアや火山礫の微粒子に富むごくち密な土層(平均20cm～50cmの厚さ)を挟み、下位には溶岩風化物由来のB層または同風化物あるいは溶岩となる。このち密土層は地元でエカスマサと呼ばれ、盤層の一種ではあるが、スコップで削ることができる。富士山麓の西から南西麓にかけて広く分布する。主に茶園、普通畑として利用されている。

大坂1統は、次郎長統のA層の下にち密な褐色火山灰由来のB層が来るものである。後述大坂3統の分布域に局在する。主に茶園、普通畑として利用されている。

今泉統は、厚い黒ボクA層の下位に、溶岩風化物由来のB層または同風化物あるいは溶

岩がくるものである。しばしば、A層だけで1m以上に達することが珍しくない（とくに凹地形のところ）。富士山麓の南麓(図幅の南東部)に分布する。主に茶園、みかん園、普通畑として利用されている。

笹場統は、大坂3統のA層が50cm以上に達したものである。主に図幅の北東部に散在する。茶園、普通畑として利用されている。下条統、羽鮒、星山丘陵地のゆるやかな斜面のはしにみられる再積性の火山灰母材の腐植層が100cmにもおよぶものである。

岩本1統、星山1統、佐折3統は林野土壌で、岩本1統は富士川左岸の星山、羽鮒丘陵に分布し、B層もしくはC層に暗赤色の安山岩風化物を有する土壌で、主としてヒノキ人工林として利用されている。星山1統は前記丘陵に分布するが、A層下部にスコリアを含みB層もしくはC層に古富士火山噴出物の風化層をもつ土壌で、主としてヒノキ人工林として利用されている。佐折3統は西富士山麓の古富士火山噴出物風化物上に分布する土壌で主としてヒノキ人工林として利用されている。

8 黒ボク土壌

これは土色の明度、彩度ともに2またはそれ以下の黒色ないし黒褐色の腐植に富む表土層（黒ボク層）の厚さが25cm以上50cm未満のもので、その下位に褐色のB層が存在する。これに属する土壌統のうち、羽鮒統は、黒ボク層の厚さは30cm内外で下層には褐色細粒質のB層がくるもので、羽鮒丘陵上に分布し、普通畑や茶園に利用されている。長貫統は、細粒質の厚さは20cm位で、下層は暗褐色ないし褐色細粒質のB層がくるもので、芝川町の河岸段丘上に分布し、普通畑や茶園に利用されている。島並2統は、細粒質の黒ボク層とその直下の褐色細粒質のB層中にスコリアが含まれ、B層はやや緊密な状態になっている。西村統は、火山灰と固結堆積岩風化物の混合物を母材とするもので、黒ボク層中に石礫が含まれ、B層の土性は粗粒質である。天子山地西麓に分布し、普通畑に利用されている。

愛鷹8統は、「沼津」「御殿場」図幅での土壌名を踏しゅう。愛鷹3統と同様であるが、黒ボクA層の厚さが減じたものである。みかん園、茶園、普通畑として利用されている。

大坂3統は、中程度の厚さの黒ボクA層の下にち密な褐色火山灰由来のB層がくる。この層は小粒なスコリア粒に富み、やや硬いことがあるので、赤マサと呼ばれることがある。富士市の北部を中心として分布する。茶園、普通畑として利用されている。

広見統は、今泉統の黒ボクA層の厚さが中程度になったものである。図幅東協部に散在する。茶園、普通畑に利用されている。

岩淵1統 「吉原・駒越」図幅での土壌名を踏しゅう。岩淵火山の安山岩類よりなる山地緩斜面にあり、礫を含む黒ボクA層、B層を特色とする。本図幅内では局部的である。みかん園として利用されている。中井出統は、表層30cm程度の腐植層とその下層に層厚30cm以上の砂質未風化スコリア層を断面内に持つもので、富士山麓、上井出から中井出にかけて主としてみられる。万野原統は、富士山麓、万野原新田から北山にかけて分布する下層に溶岩礫に富む層を持つものである。大中里統は、羽鮒丘陵の潤井川沖積に接する下部の下層に礫質の層を持つものである。

また黒ボク土壌に属する林野土壌は、愛鷹6統、愛鷹2統、富士山4統、富士山5統、大峯統、今宮1統、今宮2統、大坂2統、村山1統、村山2統、北山1統、北山2統、北山3統、星山2統、上柚野統、上稲子1統、上稲子2統、佐折1統、佐折2統、大丸山統である。愛鷹6統および2統は愛鷹山地の山麓斜面にあって、6統(B_{1B})は乾性、2統(B_{1D})は適潤性の土壌で、ともにヒノキ人工林として利用されている。富士山5統および5統は富士山南斜面の褐色森林土壌と接する部分にあり、4統(B_{1Dd})は凸斜面に分布し乾性傾向、5統(B_{1D})は緩凹斜面にあって適潤性の土壌で、両者ともヒノキ人工林として利用されている。大峯統(B_{1D})は大峯林道の西側に分布し、B層に大淵スコリア、C層に砂沢ラピリを介在する土壌で、主としてヒノキ人工林として利用されている。今宮1統、2統(いずれもB_{1D})は天照教社の西側を南下する線の東側にあって、大淵スコリアを介在する土壌で、これがB層にあるものを1統、A層中にあるものを2統とした。いずれもヒノキ人工林として利用している。大坂2統、村山1統、北山2統、北山3統は大淵スコリアの分布域の西側緩斜面に分布し、大沢ラピリを介在する土壌である。村山1統(B_{1D})はA層下部、大坂2統(B_{1D})はB層またはC層に介在し、その厚が50cm未満の土壌、北山2統(B_{1D})は大坂2統の北西部に位し、ラピリの層厚が50cm以上有するものである。北山3統は2統と同様な層厚を有するが、扇状地堆積物上の土壌で、ともにヒノキ人工林として利用されている。北山1統(B_{1C})は下層に大沢ラピリを介在するが、緩凸斜面にあって、乾性土壌構造を有する土壌で、2統分布域の最北部に分布し、ヒノキ、モミ人工林として利用されている。村山2統(B_{1D}≥B_{1D})は富士山浸蝕谷の斜面および谷底面に分布し、一般に砂礫質でときには下層にジャリマサを伴う土壌で、主としてスギ人工林として利用されることが多い。星山2統(B_{1D})は星山・羽鮒丘陵の解折斜面に分布し、A層下部にスコリアを含む土壌で、主としてヒノキ人工林として利用されている。上柚野

統 (Bl_b) は芝川に面する天子山地山麓東斜面に分布し、やや淡い黒色の A 層と極暗褐色の B 層をもつ土壌で、主としてスギ人工林として利用されている。上稲子 1 統および 2 統は天子山地に分布し、1 統 (Bl_B) はやや急凸な尾根にあって、A 層には乾性構造が発達 B 又は C 層には新第三紀の礫岩、および砂岩の風化物を有する土壌である。2 統 (Bl_b) は緩凸な尾根や緩直斜面上部に分布する適潤性の土壌で、1 統は天然広葉樹林、2 統はヒノキ人工林として利用されている。佐折 1 統および 2 統は本図幅北部の佐折地内に分布し、1 統 (Bl_B) は緩凸な尾根すじにみられ、やや薄い F—H 層と乾性構造を伴う A 層を有する土壌、2 統 (Bl_b) は 1 統の下斜面にあって、やや表層の薄い土壌で、1 統はヒノキ人工林、2 統はスギ、ヒノキ人工林として利用されている。大丸山統 (Bl_bd) は富士川右岸の蒲原丘陵に分布し、吉原・駒越図幅の土壌と同様であるが、色相、層位ともやや薄い傾向を示す。ヒノキ人工林として利用されている。

9 多湿黒ボク土壌

これは黒色ないし黒褐色を呈する腐植質表土層 (黒ボクの A 層) の厚さが 25cm 以上で、表土層とその直下の下層土層に鉄斑紋の存在がみられるものである。これに属する土壌統のうち、猫沢統は、厚層黒ボク土壌の稗久保統が水田化されたもので、下層に薄いスコリア固結層が存在する。羽鮒丘陵に分布し、水田として利用されている。小森統は、斑鉄を含む細粒質黒ボク層の下に礫層がくもの、羽鮒丘陵の一部に分布し、水田に利用されている。森山統は、厚層黒ボク土壌が水田化されたもので、下層にスコリアが含まれているが、猫沢統のような固結層を形成していない。羽鮒丘陵に分布し、水田に利用されている。上条統は、黒色を呈する厚さ 1 m 以上の腐植層をもち表土層とその直下に鉄斑紋の存在がみられるもので森山統に接して精進川沿いに分布し、水田に利用されている。

厚原統は、黒褐色の黒ボク再積土層 (礫をあまり含まぬ) と 60cm 以下に出現する砂礫層よりなる。作土下に斑鉄の集積が明瞭に認められる。富士市厚原付近の水田として見出される。

原統は、断面中に固結層を持つ火山灰を母材とする水田土壌で、全層にわたり腐植にとんでいる。御園統は、表層から 30cm 前後の位置に固結層を持つが、下層は透水性良好好で、最下部には未風化の黒灰色スコリア層がある。

10 黒ボクグライ土壌

これは鉄斑紋の存在がみられる黒色ないし黒褐色の腐植質表土層 (黒ボクの A 層) の下

50cm以内に強還元の下層土層がくる土壌である。これに属する坂本統は、羽耐丘陵斜面に分布し、水田に利用されているが、排水不良な湿田状態になっている。

11 淡色黒ボク土壌

吉永統は、愛鷹8統の黒ボクA層が薄くなるか、色が淡くなったもので、ローム層が主母材となっている。愛鷹山麓に存在する。みかん園、茶園、普通畑として利用されている。

岩本2統は、吉永統と同じであるが、富士市岩本山の丘陵上に分布する。みかん園、普通畑として利用されている。久沢統は、広見統の黒ボクA層が薄くなるか、色が淡くなったもので、礫質のB層や溶岩風化層が主体をなす。富士山麓各所の急斜面、孤立丘頂部に小面積ずつ散在する。茶園、普通畑として利用されている。

12 乾性褐色森林土壌

潤湿温帯の森林下に発達し、ABC層位をもち、主として森林植物の落葉、落枝やその分解過程のものが地表にやや厚く堆積し、暗褐色ないし黒褐色のA層と7.5YRないしは10YRの色相をもつ明度、彩度の高いB層を有する土壌である。一般に粗しょうで、乾燥破碎によって形成された乾性な土壌構造が発達するなどの形態的特徴を具えている。これに属する土壌統は、富士山8統、上稲子3統、和田島1統、岩淵3統である。富士山8統(B_B)は富士山南および南西緩凸斜面に分布し、やや黒みの強い黒褐色のA層とスコリアを多量に含むB層を有し、低海拔地(1500m以下)では主としてヒノキ、モミ人工林、高海拔地(1500m)以上では針広混交林として利用している。上稲子3統(B_B型)は天子山地の尾根すじに分布し、ヒノキ人工林として利用されている。和田島1統(B_C~B_B)は庵原山地の尾根すじに分布し、10YRの色相をもつ土壌で、主としてヒノキ人工林として利用されている。岩淵3統(B_B)は蒲原丘陵にあって、岩淵安山岩を母岩し、B層がやや暗赤色傾向を示す土壌で、主としてヒノキ人工林もしくは天然広葉樹村として利用されている。

13 褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌と同様な森林帯にあるが、斜面下部や広い緩斜面など、常に地中水分に富む環境下にあらわれる。黒褐色ないし暗褐色の膨軟なA層が発達し、その下部にある褐色ないしは暗褐色のB層に漸変している土壌である。これに属する土壌統は富士山9統、上稲子4統、上稲子5統、和田島2統、岩淵4統である。富士山9統(B_D)は富士山の南ないしは南西緩斜面にあって、富士山8統同様、やや黒みの強い暗褐色のA層と褐色な

いしはにぶい褐色を呈するBC層に多量のスコリアを含有する土壤で、海拔高の低いところ（凡そ1500m以下）では主としてヒノキ、モミ人工林、高海拔地（1500m以上）では天然針葉樹林として利用している。上稲子4統（B_D定）は天子ヶ岳から南に走る緩凸な稜線に分布し、黒褐～暗褐色のA層と褐色のB層を有する残積性の土壤で、主として天然広葉樹林として利用されている。上稲子5統（B_D）は天子山地の斜面に分布し、やや腐植含量の乏しいA層と褐色のB層へ漸変する土壤で、主としてスギもしくはヒノキ人工林として利用されている。和田島2統（B_D）は庵原山地にあって、1統の下斜面に分布し、暗褐色のやや薄いA層は暗褐～褐色の比較的薄いA～B層もしくはB層にやや判漸と移行する土壤で、主としてスギ人工林として利用されている。岩渕4統（B_D）は3統の下斜面に分布し、角礫をわずかに含むA層は概して深い、暗褐色のB層はやや浅い。主としてヒノキ人工林として利用されている。

14 湿性褐色森林土壤

上記の両褐色森林土壤と同じ森林帯に属するが、斜面下部の緩斜面もしくは谷底平坦面など水分が多く集りやすい環境下にあらわれ、黒褐色のA層と暗褐色ないしは灰褐色のB層に漸移する土壤である。これに属する土壤統は上稲子6統、和田島3統である。上稲子6統（B_E）は天子山地の沢すじに分布し、A層は暗褐色のA層とにぶい黄褐色（4/3）のA₂層に分化し、やや灰褐色ぎみのB層は比較的深く、土層内に多量の角礫を有し、主としてスギ人工林として利用されている。和田島3統（B_E）は2統の分布域下面にあって、腐植に富むA層と灰黄褐色を呈するB層にはともに層位の分化がみとめられる。主としてスギ、ときにはヒノキ人工林として利用されている。

15 暗赤色土壤

塩基性岩を母材とする土壤で、5YRの色相をもち、赤色土壤より明度、彩度とも低い土壤である。黒褐色ないしは極暗褐色の膨軟なA層から暗赤褐色のB層へ漸変する断面をもつ。これに属する土壤統は山口統（D_RD）は図幅南部の庵原山地緩凸斜面にあらわれるが、その面積は少ない。スギ、ヒノキ人工林として利用されている。

16 黄色土壤

湿潤気候の常緑広葉樹林下に生成された土壤で、暗色の薄いA層の下のB層は5YRよりも黄色の色相をもつものである。これに属する土壤統のうち、富沢統は固結堆岩風化物を母材とするもので、富士川以南の山地の一部に分布し、普通畑に利用されている。横沢

1 統は段丘堆積物を母材とするもので、富士川沿いの河岸段丘上に分布し、普通畑に利用されている。木島統は、「吉原・駒越」図幅での土壌名の踏しゅうである。岩淵安山岩を母材とし、山地斜面に分布する。上層の土色がやや暗い傾向がある。図幅西南隅に局在する。みかん園、普通畑に利用されている。富士見統は、「吉原・駒越」図幅での土壌名の踏しゅうである。鷲ノ田礫層を母材とし、山地斜面や山頂部に分布する。これも図幅西南隅に局在する。みかん園、普通畑に利用されている。

17 褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬ A 層の下に暗褐色～黒褐色の B 層をもつ土壌である。これに属する土壌統のうち、鳥並 3 統は、天子山地の山麓傾斜地に分布し、固結堆積岩の再積性風化物を母材とするもので、水田に利用されている。森林統は、土壌断面の上部は灰褐色を呈する細粒質堆積物の層で斑鉄、未風化の石礫を含んでいるが、下層は黒褐色細粒質堆積物の層からなっている。天子山麓に接する熔岩原上に分布し、水田に利用されている。久保統は、森林統に似た断面特徴を持つものであるが、細粒褐灰色土層中に薄い砂質の層が挟まれているものである。水田に利用されている。下久保統は、土層断面の全層位が黒色腐植質の河成堆積物からなり最下層にスコリアを含むものである。芝川沿いの低地に分布し、水田に利用されている。大嵐統は、砂と円礫を含む黒褐色細粒質の河成堆積物からなるもので、下層に砂礫層を有する。山間の谷底低地に分布し、普通畑に利用されている。竹の下統は、亜円礫を含む灰褐～褐色の細粒質河成堆積物を母材とするもので山間の谷底低地の一部に分布し、普通畑に利用されている。上佐野 3 統は、河成堆積物を母材とし、暗褐色細粒質で 30cm 内外の土層の下に砂礫層がくるもので、山間の谷底低地に分布し、普通畑に利用されている。上佐野 3 統は、河成堆積物を母材とし、暗褐色細粒質で 30cm 内外の土層の下に砂礫層がくるもので、山間の谷底低地に分布し、普通畑に利用されている。橋上統は、中粒質河成堆積物を母材とし、B 層の色は暗褐色を呈するが、地表下 70cm 以下はにぶい黄褐色を呈する粗粒質土性である。富士川沿いの低地の一部に分布し、普通畑、茶園に利用されている。尾崎統は、黄灰色中粒質河成堆積物を母材とするものであるが、下層は細粒質となり地表下 75cm 以下に砂礫層がくるものである。低地に分布し普通畑に利用されている。富士川 1 統は、暗褐～褐色の中粒質河成堆積物を母材とするもので、富士川沿いの低地の一部に分布し、普通畑に利用されている。宿平統は、黄灰色中粒質～粗粒質の河成堆積物を母材とするものであるが、地表下 50cm 以下に砂層、80cm 以下に砂礫層を

有する。谷底低地に分布し、水田に利用されている。肥島統は、表層は黒褐色細粒質、下層は暗黄灰色粗粒質河成堆積物を母材とするもので、富士川沿いの低地の一部に分布し、水田に利用されている。

桑崎統は、ローム層の二次堆積物を母材とする。愛鷹山西麓の谷底に局在する。普通畑に利用されている。大淵1統は、細粒礫質の黒褐色A層の厚さが50cm以下で、その下には、礫質の砂や砂礫層が続く。この層の一部は硬結して盤層をなすことが多く、ジャリマサと呼ばれるが、その分布を連続して押さえることができなかつたので、本土壤統に一括して示してある。主に富士市大淵地区の扇状地帯に分布するが、他の河川沿いにも散在する。茶園、普通畑に利用されている。

大淵2統は、大淵1統のA層が厚くなり、砂礫～砂層の出現が50cm以深1m以内となったものである。同土壤統と随伴して産する。茶園、普通畑として利用されている。中桁統は、暗～黒褐色の土層の厚さが50cm以上で、1m以内から砂礫層の出現するものである。潤川の本流からやや離れて分布する。水田として利用されている。青木統は、潤井川の冲積性の土壌で地表下50cm以内に礫がみられる。下層部の土性は砂質である。星山3統は、星山丘陵の谷底部に分布し、表層20cmは黒色のロームの二次堆積物である。

18 粗粒褐色低地土壌

比較的発達すすまぬA層の下に黄灰色、暗褐色、黒褐色のB層を持ち、土性が粗粒質の土壌である。これに属する土壌統のうち、上佐野1統は、黄灰色粗粒質の河成堆積物を母材とするもので山間の谷底低地と富士川沿いの低地の一部に分布し、普通畑に利用されている。上佐野2統は、黒褐色の未風化円礫に富む粗粒質河成堆積物を母材とし、地表下30～40cm位のところに砂礫層がくるもので、山間の谷底低地の一部に分布し、普通畑に利用されている。松本統は、潤川沿い細長く分布する砂質土壌で、水田として利用されている。富士本統は、砂礫層がきわめて浅く現出する礫質の土壌で、富士山麓の野溪周辺に散在する。畑茶園として利用されている。中里統は、須津川に接して細長く分布する砂質土壌で、下層には砂礫層がある。主に茶園として利用されている。木和田窪統は、大坂3統土壌の上に、厚さ50cm以内の砂質土壌が載っているものである。主に茶園として利用されている。

19 細粒灰色低地土壌

土性が細粒質で、土層断面の色相は灰色を呈し、斑紋の存在がみられ、地表下80cm以内

にはグライ層の出現がみられぬものである。これに属する土壌統のうち、内戻統は、灰色細粒質の河成堆積物を母材とするもので、谷底位地と富士川沿いの低地の一部に分布し、水田に利用されている。稲子川統は、灰色細粒質の河成堆積物を母材とするものであるが地表下25～30cm位から砂礫層になっている。山間の谷底低地に分布し、水田に利用されている。稲瀬川統は、稲子川統よりも有効土層が厚いもので、地表下50cm位から砂礫層になっている。山間の谷底低地に分布し、水田に利用されている。横沢2統は、富士川南岸の富沢町の山地における低地に分布し50cm内外の厚さの沖積物を母材とするもので、水田に利用されている。

松野統 富士川町地内の小河川平に分布し、作土下にオレンジの斑鉄密集帯をもつのが特色である。60cm以深からは砂礫層となる。水田として利用される。

20 灰色低地土壌

土性が中粒質で、土層断面の色相は灰色を呈し、絞紋の存在がみられ、地表下80cm以内にはグライ層の出現がみられぬものである。これに属する土壌統のうち、富士川2統は、灰色中粒質の河成堆積物を母材とするもので、土性は上・下層ともに中粒質であるが、地表下40cm位で砂礫層が出現する。富士川沿いの低地の一部に分布し、水田に利用されている。

旭町統は、シルト壤土質の灰色土壌で、富士川ぞいに局部的に存在する。水田として利用されている。

21 細粒グライ土壌

沖田統は、富士川町地内の富士川背後、溶岩流にさえぎられた低地沿いに分布し、強グライ層が30cm以内から出現する。水田として利用されている。

22 粗粒灰色グライ土壌

天間統 澗川低地に局在する砂質土壌で、強グライ層が30cmより浅く出現する。水田として利用されている。

(近藤鳴雄，縣 富美夫)
(加藤芳朗，浜田竜之助)

Ⅳ 傾斜区分図

富士宮図幅は火山地、非火山地ともに大起伏、中、小起伏山地をもち、傾斜区分も起伏量や地形発達、岩石差、水系の特色とあいまって、その地域的特性が表現されている。火山地を開析する水系はガリー状に発達すること、地形図上ではその延長の把握しにくいこともあって局地的な傾斜の表現は困難であるため、侵食差は水系をそのまま表記した。富士火山は裾野の広い円錐形山体でもあり高度と傾斜区分との対応が比較的明瞭であり、高度とともに傾斜も増大してゆくが、山麓斜面は $3\sim 8^\circ$ の傾斜が広い。局地的に溶岩流の末端が急斜面として表現されるが、何回かの溶岩流出とその末端の舌状地がそれをあらわしている。傾斜区分は土地利用との関係も密接である。

天子山地から庵原山地にかけては大起伏山地が山頂と周辺部にそってみられ、中小起伏山地との配列は富士火山のように明瞭ではない。V字状に刻む谷にそう谷壁斜面は急崖や急傾斜地となる。なお、山頂に平坦面が残り山地の特性を示すが傾斜区分にも表現されている。一般に山地では同一傾斜区分の連続性が乏しく、斜面形とともに場所による変化の大きいこと、構成岩石によって侵食差があり、それが傾斜区分に表現されていることなどの結果がみられる。富士川の下刻と曲流ともなう白鳥山周辺の急傾斜地は局地的であるが特性を示している。

(北川光雄)

V 水系谷密度図

富士宮図幅にふくまれる水系はほとんど富士川水系にふくまれ、潤井川水系も星山放水路によって富士川に結合しているため、ひとつの一級河川の水系となっている。富士南斜面を流下する河川や愛鷹山の水系も沼川をへて潤井川と合するために同一水系となる。富士川を中心として芝川、潤井川、佐野川、稲瀬川などが主な河川であり、富士火山斜面を流下する伝法沢、凡夫川、不動沢、ガラン沢などにも特色がある。富士山に発達する水系は初期の段階であるために放射状の水系がおおくその連続性に乏しい。富士山の放射谷は一般に高位置にみられるスプーン状の形態をもつ谷、中腹にみられる幅のせまい深い溝状の谷、山麓部にみられる緩斜面内の幅も深さも小さい小規模の谷にわけられている。雨水やゆう雪水の集中は溶岩流の形や溶岩の構造などによって初期的には流路が決定されるようであるが、火山砂礫層におおわれている部分がおおいために地下への透透量が大きく、表流水の流量がすくなくなると侵食量は減少する。したがって火山の水系については定常流と平常は水のない水無川とを区分して考える必要が今後の問題である。また透透がおおいために下流への継続もすくなく局地的な水系もおおい。形態的にも溶岩棚や岩樋とよばれるような溝状の谷とともに火山砂礫のおおい所では砂沢とよばれるように沢が砂で埋まっている例もある。このような谷は満水時の一時的出水による土石流的災害をうける可能性もある。標高 300 m 以下の地域になると湧水にもなう流量の増大がみられ、定常流になることもおおい。いずれにしても火山斜面の水系のあつかいについては、流況や河状の把握が課題であろう。西部の非火山地域の水系は構造的に支配される南北方向の傾向をつよくあらわす水系が基本型であり、直線的な流路が稲子川、佐野川などでみられるが、樹枝状の支谷を発達させながら流域を拡大したあとがうかがえる。また村山丘陵、星山丘陵では北東南西方向の傾向がつよく平行した水系をもつが、星山丘陵の場合には化石谷ともいわれるように流量は相対的にすくなくなっている。

谷密度は差異が大きく第三系山地や礫層からなる丘陵地、開析のすすんだ愛鷹火山などで大きくなっている。また火山性丘陵地も周辺にくらべて大きい数値をみせている。砂礫層からなる丘陵地は短小な樹枝状の谷となり密度が大きい。火山扇状地でも大淵は平坦な地形をもち水系谷密度ともすくないが、地形図の表現をもとにした水系の判定の限界であろう。平坦地や平野部では自然の水系とともに水田かんがいの用排水路のような人工河

川が発達している。

(北川光雄)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
A	27	19	24	32	35	31	17	16	25	9	14	22	13	20	26	24	30	35	13	21
B	27	23	23	24	29	24	21	11	19	16	16	20	18	20	14	26	20	21	18	24
C	15	23	16	26	32	26	14	14	15	20	18	19	21	21	24	19	22	17	10	13
D	24	25	20	25	31	28	5	10	20	27	12	18	16	20	17	19	12	15	16	15
E	21	22	32	20	28	25	13	14	14	23	12	17	19	14	15	14	8	9	16	13
F	23	15	31	23	21	26	14	7	12	20	18	13	14	21	14	7	4	2	8	14
G	20	14	21	32	29	25	20	13	14	14	11	7	16	24	16	5	3	3	16	14
H	23	15	16	22	28	11	12	14	12	9	13	13	20	17	18	11	3	10	19	21
I	22	13	21	25	22	9	10	11	8	10	10	5	14	11	18	18	18	18	22	22
J	17	20	20	30	10	5	5	10	8	9	4	9	22	16	21	14	20	17	19	15
K	13	24	18	29	17	6	7	12	10	0	13	12	18	21	15	19	16	17	22	10
L	9	18	19	23	15	14	10	12	6	3	11	14	18	12	13	15	16	19	26	17
M	14	14	19	24	26	19	6	8	7	5	14	19	13	4	12	16	13	21	22	16
N	25	13	16	23	33	16	7	19	10	6	12	18	13	15	12	14	12	18	21	21
O	37	20	22	16	23	14	27	9	4	11	14	9	11	14	11	12	10	23	20	32
P	22	31	29	20	16	14	27	16	5	6	13	12	14	8	2	9	10	20	16	26
Q	28	35	34	22	11	12	15	19	16	13	6	11	7	0	4	11	21	17	21	30
R	25	33	39	32	25	22	9	10	16	10	7	11	10	0	7	14	15	10	25	29
S	27	45	37	30	30	37	22	14	9	21	8	16	5	5	8	7	9	7	23	27
T	36	43	44	30	29	34	35	26	19	12	16	9	8	4	1	9	10	18	22	16

Ⅶ 利水現況図

本図葉内の北南に流れる芝川は、地下水が大量に湧出している猪之頭（図葉外）にはじまっている。この猪之頭には、芝川源流としての県営養鱒場付近（図葉外）の湧水のほか、同地区内に大小無数の湧泉群があり、これらの湧水を集めて白糸・音止の二滝を作り、南下し、富士川に注いでいる。

この川は、湧水に由るがため流れは清く、水量も多いため、灌漑、発電、養鱒、簡易水道や上水道の水源として利用されている。

一方、富士の高嶺に雪は降りける、で知られる田子ノ浦に注ぐ潤井川も、大沢を源として淀師地内からの湧水と、これに大量の地下水利用による養鱒場の流入が加わり、さらに湧玉池湧水による神田川と、村山・大岩出水・小泉地先での湧水が流入して潤井川を形成している。これら、富士の白雪にはじまる地下水は、工業用水や灌漑用水として利用されている。

（山本 貢，杉田隆二，加藤忠敏）

Ⅶ 土地利用現況図

1 農 地

西富士山麓の緩傾斜地に分布する農地は、西富士山麓のほぼ中央部に位置する富士宮市市街地の以北においては、一部に庭木用の樹木畑や茶園としての利用もみられるが、大半が普通畑として利用されている。また、市街地周辺の農地は最近住宅地や商工業用地への転用が著しくすすんでいる。富士宮市市街地の西南においては、普通畑としての利用よりも茶園としての利用が多いが、本図幅では右側最下端に位し、富士市に属する富士山麓緩傾斜地と愛鷹山麓緩傾斜地の一部にはみかん園としての利用がみられる。

富士山麓と羽鮒、星山丘陵の間に南北に流れる潤川沿いの低地に分布する農地は水田として利用されているが、富士宮市街地の南部と星山丘陵の南麓に接する富士川扇状地の扇頂部に接する部分は、農地の転用による住宅地、商工業用地としての利用が増加している。

富士川と潤川との間にあって富士市、富士宮市に属する星山丘陵上の緩傾斜～ほとんど平坦な地形面に分布する農地は、主に普通畑と茶園に利用されているが、南部の岩本山南斜面はみかん園として利用されている。

潤川と天子山地の山麓を南北に流れ、南端において富士川と合流する芝川との中間にある羽鮒丘陵上の緩傾斜地に分布する農地は普通畑としての利用が多いが、一部に草地（牧草畑）としての利用がみられ、斜面の一部や芝川の流域に分布する農地は水田に利用されている。羽鮒丘陵の南端における段丘上に分布する農地は、普通畑や茶園として利用されているが、最近住宅地への転用が増加している。

天子山地の山麓傾斜地に散在している農地は主に普通畑として利用されている。また山間部を南北に流れて富士川と合流する稲子川によって形成された狭く細長い谷底低地に分布する農地は水田に利用されているが、一部に普通畑への転換もみられる。

山梨県南部町に属する天子湖の北方に分布する佐野川に沿った谷底低地の農地は、主に水田として利用されているが、一部には普通畑、茶園としての利用もみられる。

富士川の本流以南の山地斜面に分布する農地は、山梨県富沢町と清水市および芝川町に属する地域においては主に普通畑と茶園に利用されている。また、富士川町北松野、南松野に属する地域においては主にみかん園に利用されている。この地域の山間に形成されて

いる谷底低地は、主に水田として利用されている。

富士川の本流に沿って各所に形成されている低地に分布する農地は、主に水田と普通畑に利用されているが、本図幅中央部南端の富士川町木島地区においてはみかん園に利用されている。また、山梨県富沢町に属する河岸段丘上の農地は主に普通畑として利用されている。

(近 藤 鳴 雄)

2 林 地

本図幅の区域に含まれる林地は、中央部分を右下りに流下する潤川によって東西に二分して概況を述べるのが適当といえよう。このうち東側部分は富士山の裾野部分に当り溶岩流が随所にみられ地味も劣り森林造成の適地には欠けるうらみがある。更に概ね1,000メートル以上の標高を有する国有林地域と、1,000メートル以下の民有林地域に分けられる。

国有林地帯は標高約1,400メートル附近までは杉檜を中心にした人工林化が進んでいるが、これ以上は天然林混交の状態で、1,800メートル以上になるとモミ、ツガなど天然の針葉樹がきわ立っている。

一方、民有林についてみると、昭和31年から34年までの間、富士山麓森林総合開発事業が実施され、国道139号線に沿って展開する富士、富士宮の市街地、集落地を除いては一次造林地となっている。また富士市大淵地区には丸火保健休養林が整備されて、マメザクラ、コナラ、ヤマモミジなど万葉の歌に読まれている植物を集めた万葉の森が人々に憩いの場をあたえている。

この地域には室永山噴火などの際流出した溶岩流が幾条にも走り植林が困難な場所が多かったので客土植林が試みられ、先人の労苦のあとを眼のあたりに見ることができる。

次に西側部分についてみると、天子山系により静岡県側と山梨県側に分けることができる。いずれも地形が富士山麓地域より急峻であるが地味は良く人工林化も進んでいる。

静岡県側はその大半が芝川町となるが、芝川、稲子川沿いの低地には杉の造林地がみられ、竹林の分布もきわ立っているが他は檜を主体とする造林地となっている。清水市内では国道52号線の両側に檜の人工林が展開しているが、富士川町内に入るとゴルフ場の開発や茶園造成などで散開林地となっている。

山梨県側は南部町と富沢町の一部が含まれているが、南部町地域では図幅中の最北部約

400ヘクタールが国有林となっており、その他は天子湖を中心にいずれも檜を中心とした造林地となっているが、この地域は特に地形がけわしく、天然林には、くぬぎなどしいたけ原木が多くみられる。地形が急峻で崩壊しやすいので林地の大半が保安林に指定され重要な水源地ともなっている。

富沢町は南部町の南側に位置する有利さと標高が低く、地形もややゆるやかであることから森林造成は更に進み、山梨県下では有数の林業地となっているが、林種、林相に大きな差異はない。

(桐 山 毅)

森 林 概 況 (単位 ha 千㎡)

市 町 村 名	総面積	うち図幅 中面積	林 野 総面積	民 有 林			国有林 面積
				面積	う ち 人工林	蓄積量	
富 士 市	21,534	10,831	10,799	8,719	7,166	672	2,080
富 士 宮 市	31,422	19,375	20,481	13,486	9,973	944	6,995
清 水 市	22,783	418	10,981	9,658	7,268	655	1,323
富 士 川 町	3,109	1,187	1,671	1,671	1,394	119	—
芝 川 町	7,450	6,837	5,412	5,360	4,146	376	52
南 部 町	11,244	2,106	9,808	7,589	5,082	420	2,219
富 沢 町	8,773	1,356	7,783	7,783	5,475	546	—
合 計	106,315	42,110	66,935	54,266	40,504	3,732	12,669

- 1) 資料：県林政課地域森林計画書
- 2) 林野面積は図幅以外の部分含む

1980年2月 印刷発行

西 富 士 地 域

土地分類基本調査

富 士 宮

編集発行 静岡県農地森林部農地企画課

静岡市追手町9番6号

印 刷 株式会社 大村印刷所

静岡市常磐町2丁目12